■　私が走る理由　■

「私たちランナー一同は、秋晴れの下、ここ野々市の地を走れることに喜びを感じ、多くのランナーと励まし合いながら、ひたすらゴールを目指し、笑顔で駆け抜けることを誓います」。３７回を数える『野々市じょんからの里マラソン大会』は、雲一つない快晴になった。８０人近い生徒とともに、年齢も考えずに参加させてもらった。

宣誓の依頼があったのは、２週間ほど前のことだ。私と１年生２名の３人で、とのことだった。断る理由は見当たらないので快諾し、文言を考えた。長すぎると覚えられないので短めにし、３人がそれぞれのソロパートを組み込むことで、暗記の負担を減らした。朝、校長室で練習して臨んだのに、ちょっと噛んでしまった。



秋晴れの空に号砲が響く。校舎前をスタートし、市役所や市立図書館をめぐる１周およそ５㎞のコースを２周する。校門には吹奏楽部が陣取り、力強い演奏で参加者の背中を押してくれる。気温は高くはないが、走り始めるとすぐに汗ばむ。降り注ぐ日差しが体感温度を上げる。少しペースをセーブすることにした。

１週して、スタート地点に帰ってくると、多くの先生や生徒、保護者が沿道から声援を送ってくれた。くたばりかけた身体に元気が戻る。大勢が参加するマラソン大会は、ある種のお祭りのようだ。ランナーと沿道の応援が一体となってイベントをつくる様は、練り歩く神輿や山車と観客に似ている。楽しまなければ損だと思う。

ランニングが日課になって、１２年以上が過ぎた。スケジュール的に走れない日もあるが、１年で３００日以上は走っている。毎日が楽しいわけではない。気分が乗らない日も、体が重い時もある。それでも私は走ろうとする。

私はなぜ走るのか。自分に課していることをやめることは、自分に敗けることになるという思いもある。だが、それだけではない。走り終えたときに生きているという感覚がある。それが私を突き動かす。生きることは、単に呼吸をすることではない。突き動かされる何事かに自ら進んで飛び込んでいくことと同義である。

ゴール後いただいた「じょんから汁」が体に染み渡る。しんどくても走ってよかったと思える瞬間だ。ゴールにたどり着いた者だけが見せられる笑顔の花が咲き、達成感にどっぷりと身を浸す。またどこかでこの満足感を味わいたいと思う。身体はくたくたなのに、なぜか気持ちは次のレースに向いている。

ひとつのことをやり遂げて、また次の目標に向かおうとする。生きている実感とはまさにこういうものなのだ。